

普通期栽培用の水稲品種「あきの舞」の紹介

近年、普通期水稲では、夏場の登熟期の高温や「ヒノヒカリ」に偏った品種構成により発生する刈遅れ等が原因の品質低下が問題となっています。そのため、県では、①普通期栽培用の早生熟期で、②高温登熟性に優れ、③「ヒノヒカリ」並の良食味で収量性に優れ、④病害虫抵抗性を持つ品種の育成を行ってきました。

このたび、高温登熟性に優れ、多収・良食味の普通期栽培用の水稲品種「あきの舞」が誕生しました。「ヒノヒカリ」と比較すると、出穂期が2日、成熟期が6日遅い早生～中生種で、主力品種の「ヒノヒカリ」や「あきほなみ」との作期分散が可能です。高温登熟耐性が強く、背白米の発生が少なく玄米の外観品質が優れています。また、千粒重がやや重く、収量は約1割多くなります。

農政普及課では今年、吉田地域に栽培技術展示ほを設け、上記の特性を確認しました。栽培管理は、「ヒノヒカリ」と同様です。令和6年に奨励品種に選定し、県内各地での生産を奨励することとしています。興味・関心のある方は最寄りのJ Aが農政普及課までお問い合わせください。



選ばれる茶産地の育成 ～有機JAS認証取得に向けた取組～

松元地域では、令和4年度から有機JAS認証取得に向けた取組を生産者が一体となって進めており、現在、地域の4分の1に当たる50haで取組が進められています。(茶の有機JAS認証取得には、3か年の転換期間が必要となります。)

農政普及課では、有機JAS認証取得に向けて、様々な支援を行っており、特に販路開拓は、EU向け紅茶の製造支援や、抹茶の原料となるてん茶工場の整備に向けた話し合い活動のほか、八女市での先進地視察研修等を通じた他産地の事例収集などを生産者と一緒に行っています。

引き続き、実需者のニーズに対応した茶生産に取り組むとともに、11月からは、様々なイベントで「まつもと茶」のPRも行いますので、お見かけの際は是非お立ち寄りください。

品名	産地	特徴
EU向け紅茶	松元地域	有機JAS認証取得に向けた取組を進め、品質向上を図っている。
抹茶	松元地域	てん茶工場の整備に向けた話し合い活動を行っている。
その他	松元地域	様々な茶産地を育成している。



写真1 EU向け紅茶の製造方法

写真2 先進地視察研修(てん茶工場視察, 意見交換)

鹿児島地域振興局農林水産部農政普及課

鹿児島地域アグリ通信

編集発行 鹿児島地域振興局農林水産部農政普及課
〒892-8520 鹿児島市小川町3番56号
TEL 099-805-7377 FAX 099-805-7408

新規就農者の早期経営確立をめざして

～今年度上半期の取組紹介～

農政普及課では、新規就農された方々が地域に定着し、少しでも早く目標とする農業所得を確保できるように、関係機関や指導農業士の方々と連携し、新規就農者の方々にサポートしています。

地域の先輩農業者や関係機関との相互交流を図る「新規就農者励ましの会」や基礎的な農業技術(土づくり, 病害虫, 農作業安全, 経営)を学ぶ「農業基礎研修会」、部門(野菜, 畜産, 茶)ごとに技術を学ぶ「部門別研修会」のほか、定期的なほ場巡回指導、パソコン簿記講座、資金相談への対応などを行っています。

就農された皆様が早く経営確立されますよう、今後も引き続き支援していきます。



写真1 新規就農者励ましの会



写真2 農業基礎研修会(農作業事故VR体験)



写真3 部門別研修会(畜産部門放牧研修)



写真4 認定新規就農者ほ場巡回

糖含有珪藻土を活用した土壤還元消毒効果の安定化について

令和5年度から鹿児島地域振興局では、環境にやさしくかつ消毒効果の高い土壤還元消毒資材「糖含有珪藻土」の普及を図っています。糖含有珪藻土は、土壤を湿水状態にすることで資材中に含まれる糖分が土壤深層まで浸透するため、深さ60cmまで土壤を還元化させ消毒することができます。しかし、土壤に耕盤層※が存在すると、浸水性が低下し、深層層への消毒効果が不十分になることが懸念されます。そこで、今回は土壤深層まで安定して土壤消毒効果を得るための方法と関連する事例を紹介します。

※耕盤層：トラクターなど大型機械の圧力によって作土層の下に形成された非常に硬い土層のこと。
耕盤があると浸水性の低下や根の伸長阻害などが引き起こされる。

1 ほ場の土壤硬度調査と耕盤破碎方法

- (1) 耕盤層ができると植物の根の伸長阻害や透水性が悪化します。
- (2) 土壤硬度計を用いて、土壤の硬さを測定します(写真1,2)。
- (3) 耕盤層が存在したら心土破碎機(サブソイラ、プラソイラ等)を用いて耕盤を破碎します。



写真1 簡易型貫入式土壤硬度計 写真2 土壤硬度調査の様子

2 主な土壤病害の生息域と耕盤破碎の効果

- (1) 土壤病害虫は、種類によっては土壤深度40cmまで生息しています。軟弱野菜ではフザリウム菌、トマト、ナス等では青枯病菌が土壤中での生息域が深く、防除が困難です(図1)。
- (2) また、消毒範囲は有機物が届いた範囲に依存するため、耕盤が形成されると水に溶けた有機物が土壤深層まで浸透せず、土壤深層に生息する病害虫に対する消毒効果が不十分となります。
- (3) 耕盤を破碎することで、土壤物理性や透水性が向上し、深層層まで有機物が達することで、深層層の還元化が図られ、深層層の病原菌を死滅させることが可能となります(図2)。

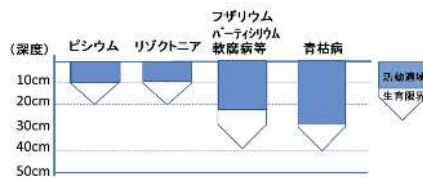


図1: 各種土壤病害の生息域

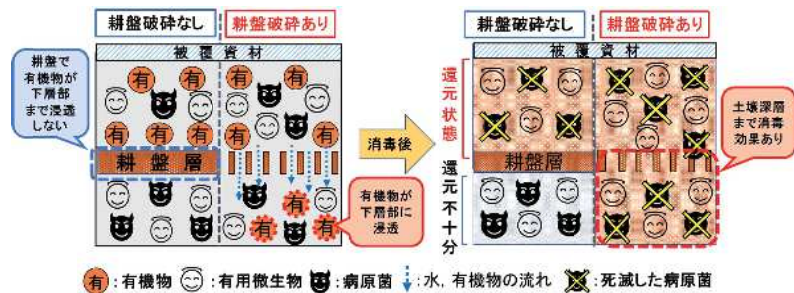


図2: 耕盤破碎の土壤還元消毒の効果

3 おわりに

土壤還元消毒で安定した消毒効果を得るためには、消毒ほ場の耕盤層の確認が重要です。耕盤の有無を調査したい方は、最寄りの市農林事務所又は農政普及課までお問い合わせください。

夏期の昇温抑制対策について

近年、夏の気温の特徴として極端な高温日が多くなっており、花き栽培も高温障害や品質低下が問題になっています。これまで、寒紗等での遮光でハウス内の温度を抑える対策がとられてきましたが、これまでの昇温抑制対策では十分とはいえなくなっています。そこで農政普及課では、近年注目されている「遮熱資材」の昇温抑制効果を検証することにしました。遮熱資材には、熱源となる赤外線を反射する一方で、植物の光合成に必要な可視光線は透過させる特性があります。

今回は、トルコギキョウの単棟ハウスで「ワリフ明涼30w」の外張りりと、オリエンタルユリの鉄骨硬プラハウスで「青天張」の内張りの昇温抑制効果を検証しました。

【実証結果:ワリフ明涼30w(トルコギキョウ)】

「ワリフ明涼有り区」は「無し区」に比べて、8月のハウス内最高気温(月平均)が約1.4℃低くなりました。

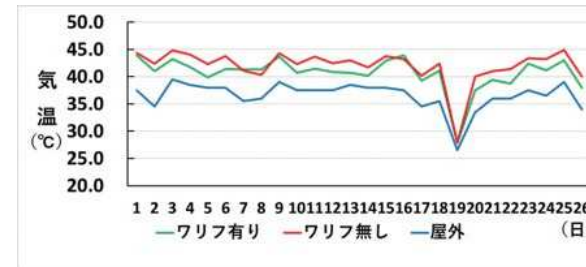


図1: ワリフ明涼の実証結果(8月の日最高気温の比較)

表1: 最高気温8月平均の比較

		ワリフ明涼	屋外
有り	無し	40.6℃	42.0℃
			36.5℃



写真1: ワリフ明涼展張の様子

【実証結果:青天張(オリエンタルユリ)】

「青天張」を張ることで、8月のハウス内最高気温(月平均)が「屋外」よりも約1.6℃低くなりました。

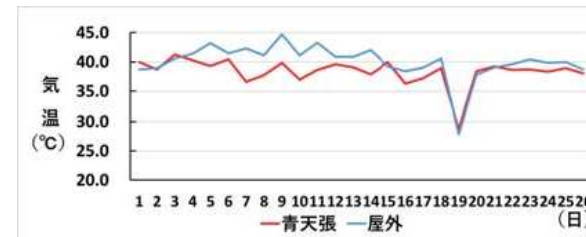


図2: 青天張の実証結果(8月の日最高気温の比較)

表2: 最高気温8月平均の比較

青天張	屋外
38.4℃	40.0℃



写真2: 青天張区(内張)

このように、遮熱資材を活用することで、ハウス内気温の上昇を抑えられる結果になりました。遮熱資材は、他にも数種類出ていますので、これらを活用して今後の夏期の昇温抑制対策を実施してください。